

津  
端  
亨  
編纂

現代短歌分類辭典

新裝判  
43卷



現代短歌分類詩典

津

端

亨

編

纂

章

江苏工业学院图书馆藏

新裝判  
43卷

現代短歌分類辞典

新装版43巻

通巻201

|              |                  |           |
|--------------|------------------|-----------|
| 平成六年九月       | 八日発行             | 定価一七、四〇〇円 |
| 著者発行<br>兼印刷者 | 津 端 亨            |           |
| 発行所          | 現代短歌分類辞典刊行所      |           |
|              | 代表 津 端 亨         |           |
| 〒345         | 埼玉県北葛郡杉戸町宮前一九六一五 |           |
|              | 電話(〇四八〇)三八一〇〇四〇番 |           |
|              | 振替 東京三一九三二一四     |           |

( I S B N 4 - 87706 - 201 - 7 )

## はがき【名詞】〔続き〕

戦地より寄せし葉書に私のこころは書かずあはれわが友⑤

半田良平

その花をゑがきてたびし御はがきをわが取る時に君既になし①

花田比露思

立ちながら東京へ出すはがきを書く郵便局の昼の静けさ③

矢代東村

たどりつつ読むこの葉書は四五行にて雑誌未着を責めて敵しき⑥

松田常憲

谷波のみ寺まうでのこのハガキ君の名がみゆ死にたる後に⑬

松村英一

旅帰りの吾をば待ちて机には税務署に出頭せよとの葉書がありき

松田常憲

⑦

⑦

初井しづ枝

机の上にありし二三冊を積みかさねその横に君の葉書を置きぬ①

堀内通孝

妻とわが離れ住めるを羨みて寄せこし葉書いく日机に④

千代国一

吊橋の揺れおほらかに渡りきぬ葉書あかるき細溪のみち(多磨四)

小川フミ子

転往の葉書うけし朝新聞に愛の二人の写真が載れり

長谷川銀作

電話もて経過を問はず人はがきもて慰めます人見舞給ふ人⑥

花田比露思

十日まり前にたよりのハガキまだ机上にありて確かなる文字①

印田巨鳥

(老師)

東京に明後日は着かむこのはがき妬しと思ふ不図の心に①

川浪磐根

床のうへに知らせのはがき持ちて坐りわれの身体の震へはやまず

柴生田稔

②

友の家焼原に一つ残るとある葉書の四五行の文字に眼をさらす⑦

松田常憲

友の葉書、妻死せりと、遠く、告げ来しを、間にはさみ、閉ぢし

土岐善磨

本かな。①

友の葉書よみ返す妻はおくりたる古着の類を恥しみいふも⑦

松田常憲

とりとめなきことの書きある妻のはがき隅に小さきダリヤを画が

丸山鶴松

けり

涙おつ遠き日本の子におくるはがきにかける一行の句に

茅野雅子

(新萬葉集五)

新年を祝ぎたる葉書一三葉をりをり届く元旦も二日も②

村田利明

逃げ場なくば留守宅に葉書たびし過ぎし日をしのぶ時折があり⑦

松田常憲

二三行走り書せしはがきにはいま敵陣にむかふとありぬ

小川明

(支那事変統後)

年頭のはがき文面なきも来つ未来は白色よき歳となれ②

川浪磐根

⑬ 脳軟化症の君の字たどりとどり読みしづかにおきぬ一枚のハガキ

松村英一

のびすぎしそらまめ霜に倒れをりはがき出しにゆく畦の片側⑤

鹿兒島壽藏

ハガキ一枚の自殺の知らせ茫然とつくゑにおけば君の面影⑬

松村英一

葉書一枚かき終る間に冬の日ざし机を二寸ばかりうごきぬ①

菊山当年男

葉書一枚しんじつ書けぬ無力さを五十八歳病みて知りにけり⑤

吉野秀雄

葉書一枚たんねんに書きあげ破りすてて僅かにつなぐ瞬間ありき

館山一子

④

葉書九枚に細ごまと書きし子の便りまだ書き足らぬ事ありと結ぶ

若林牧春

⑤

葉書でも用事はすむに何かしらことあるらしく夫に電話す①

萱沼利子

葉書に大きくこだはりもなくかきてありまことにこれは雄還の字

熊谷武雄

なり②

# 目次

## 目次

| 歌数                  | 頁数  | 歌数               | 頁数  | 歌数           | 頁数  |
|---------------------|-----|------------------|-----|--------------|-----|
| はがき                 | 七五  | はかば〔墓場〕          | 二八  | はぎ〔萩〕        | 九六二 |
| はがくれ〔葉隠れ〕           | 八   | ばかめ〔掃〕           | 一   | はぎききょう〔萩桔梗〕  | 九   |
| はかげ〔葉陰・葉影〕          | 四八  | ばかばなし〔馬鹿話〕       | 二   | はぎすすき〔萩薄〕    | 一三  |
| ばかさわぎ〔馬鹿騒ぎ〕         | 一   | ばかばやし〔馬鹿囃子〕      | 一   | ばきすたん〔パキスタン〕 | 三   |
| ばかしょうじき〔馬鹿正直〕       | 二   | はかはら〔墓原〕         | 一四七 | はきだす〔吐き出す〕   | 二一  |
| はがす〔剝がす〕            | 一四  | はかま〔袴〕           | 五一  | はきだす〔掃き出す〕   | 三   |
| はかせ〔博士〕             | 一〇三 | はかまいり〔墓参り〕       | 一   | はきだめ〔掃き溜め〕   | 六   |
| はかせ〔羽風〕             | 一五  | はがみ〔歯噛み〕         | 二   | はきちらす〔吐き散らす〕 | 三   |
| はかぜ〔葉風〕             | 五七  | はかもうで〔墓詣で〕       | 四   | はぎでら〔萩寺〕     | 五   |
| はがた〔歯形〕             | 一   | ばかもの〔馬鹿者〕        | 二   | はぎのはつゆ〔萩葉露〕  | 一   |
| はがた〔歯型〕             | 三   | はかもり〔墓守〕         | 七   | はきはき         | 一   |
| はかた〔博多〕             | 二   | ばかやろう〔馬鹿野郎〕      | 二   | はきはきと        | 五   |
| はかたおび〔博多帯〕          | 一   | はがゆ              | 四   | はきむら〔萩むら〕    | 二   |
| はかたにんぎょう〔博多人形〕      | 一   | はがゆし〔歯がゆし〕       | 二   | はきもの〔履物〕     | 四   |
| はかたわん〔博多湾〕          | 一   | はからう〔計らう・図らう〕    | 一   | ばきやく〔馬脚〕     | 三   |
| ばかづら〔馬鹿面〕           | 一   | はからず〔計らず・図らず〕    | 一六  | はぎよう〔霸業〕     | 一   |
| はかどころ〔墓所・ぼしょ〕       | 二七  | はからずも〔計らずも・図らずも〕 | 三二  | はぎよく〔破局〕     | 三   |
| はかどる〔捗る〕            | 八   | はかり〔秤・計り〕        | 二   | はぎれ〔歯切れ〕     | 六   |
| はかない〔果敢無い・儂い〕       | 四   | ばかり              | 四六三 | はく〔箔〕        | 一四  |
| はかなくなる〔果敢無くなる・儂くなる〕 | 二   | はかりごと〔謀〕         | 一一  | はく〔吐く〕       | 二〇  |
| はかなごと〔果敢無事・儂事〕      | 三四  | はかる〔計る〕          | 一七  | はく〔刷く〕       | 七   |
| はかなし〔果敢無し・儂し〕       | 三八  | はかる〔測る〕          | 五   | はく〔佩く〕       | 八   |
| はかなしごと〔果敢無し事・儂し事〕   | 三   | はかる〔量る〕          | 八   | はく〔穿く〕       | 二二  |
| はかなむ〔果敢無む・儂む〕       | 三三  | はかる〔謀る〕          | 二   | はく〔履く〕       | 一三  |
| はがね〔鋼〕              | 三〇  | はき〔破棄〕           | 二   | はく〔掃く〕       | 一三六 |

|                |    |     |                 |    |    |              |     |     |
|----------------|----|-----|-----------------|----|----|--------------|-----|-----|
| はぐ〔剝ぐ〕         | 一九 | 八四  | はくじ〔白磁〕         | 四二 | 一三 | はくぜん〔漠然〕     | 一〇  | 一四一 |
| ばく〔獮・獮〕        | 一  | 八五  | ばくし〔爆死〕         | 八  | 二四 | はくそ〔齒尿〕      | 一   | 一四一 |
| はくあ〔白亜〕        | 二二 | 八五  | はくしじやっこう〔薄志弱行〕  | 一  | 二四 | ばくだい〔莫大〕     | 一   | 一四一 |
| はくい〔白衣〕        | 八九 | 八五  | はくじつ〔白日〕        | 三六 | 二四 | はくだく〔白濁〕     | 九   | 一四一 |
| ばくうち〔博打〕       | 六  | 八八  | はくじつむ〔白日夢〕      | 一  | 二五 | ばくだん〔爆弾〕     | 五五  | 一四二 |
| はくうん〔白雲〕       | 八一 | 八八  | はくしや〔拍車〕        | 二  | 二六 | はくち〔白痴〕      | 一二  | 一四三 |
| はくうんぼく〔白雲木〕    | 二  | 一〇九 | ばくしや〔幕舎〕        | 九  | 二六 | ばくち〔博打・博突〕   | 一〇  | 一四四 |
| はくえん〔白煙〕       | 一四 | 一〇九 | はくじやく〔薄弱〕       | 四  | 二六 | ばくちく〔爆竹〕     | 三   | 一四四 |
| ばくおん〔爆音〕       | 一二 | 一〇九 | はくしやせいしょう〔白砂青松〕 | 一  | 二六 | はくちび〔白痴美〕    | 一   | 一四四 |
| ばくが〔麦芽〕        | 五  | 一一三 | はくしゅ〔拍手〕        | 七  | 二六 | はくちゅう〔白昼〕    | 四三  | 一四四 |
| はくがい〔迫害〕       | 三  | 一一三 | はくじゅ〔白寿〕        | 四  | 二八 | はくちゅうむ〔白昼夢〕  | 四   | 一四五 |
| はくがんし〔白眼視〕     | 一  | 一一三 | ばくしゅう〔麦秋〕       | 二四 | 二八 | はくちょう〔白鳥〕    | 一一四 | 一四六 |
| はぐき〔齒茎〕        | 四  | 一一三 | はくしよ〔白書〕        | 一  | 二九 | はくてん〔白点〕     | 一   | 一四九 |
| ばくぎやくのとも〔莫逆の友〕 | 一  | 一一三 | はくしよ〔薄暮〕        | 一  | 二九 | ばくと〔博徒〕      | 二   | 一四九 |
| はくぎん〔白銀〕       | 三四 | 一一三 | はくじよう〔白状〕       | 一  | 二九 | はくとう〔白桃〕     | 八一  | 一四九 |
| はぐくむ〔育む〕       | 五〇 | 一一四 | はくじよう〔薄情〕       | 四  | 二九 | はくどう〔白銅〕     | 五   | 一五一 |
| はぐくもる          | 一  | 一一六 | ばくしよう〔爆笑〕       | 五  | 三〇 | はくどう〔拍動〕     | 二   | 一五一 |
| ばくげき〔爆撃〕       | 五六 | 一一六 | はくしよく〔白色・しろいろ〕  | 一五 | 三〇 | はくとうおきな〔白頭翁〕 | 六   | 一五一 |
| ばくげきき〔爆撃機〕     | 一九 | 一一八 | はくしん〔迫真〕        | 一  | 三〇 | はくとうざん〔白頭山〕  | 一   | 一五一 |
| はくげきほう〔迫撃砲〕    | 九  | 一一八 | はくじん〔白人〕        | 一〇 | 三〇 | ばくとして〔漠として〕  | 二   | 一五二 |
| はぐさ〔莠〕         | 二二 | 一一九 | はくじん〔白刃〕        | 一八 | 三一 | はくないしょう〔白内障〕 | 一   | 一五二 |
| はくさい〔白菜〕       | 五八 | 一一九 | ばくしん〔爆心〕        | 二  | 三一 | はくねつ〔白熱〕     | 六   | 一五二 |
| ばくさい〔爆碎〕       | 一  | 一二二 | はくしんち〔爆心地〕      | 六  | 三一 | はくば〔白馬〕      | 三   | 一五二 |
| はくさん〔白山〕       | 三三 | 一二二 | ばくしん〔驀進〕        | 六  | 三一 | ばくは〔爆破〕      | 三〇  | 一五三 |
| はくさんいちげ〔白山一華〕  | 二  | 一二三 | はくせい〔剝製〕        | 一四 | 三三 | はくばい〔白梅〕     | 三三  | 一五四 |
| はくさんちどり〔白山千鳥〕  | 四  | 一二三 | はくせつ〔白雪〕        | 三一 | 三三 | ばくばく〔漠漠〕     | 二   | 一六二 |
| はくさんふうろ〔白山風露〕  | 一  | 一二三 | はくせん〔白扇〕        | 一  | 四〇 | ばくばく         | 一   | 一六二 |
| はくし〔白紙〕        | 二六 | 一二三 | はくせん〔白線〕        | 一一 | 四〇 | はくばだけ〔白馬岳〕   | 一六  | 一六二 |

|              |         |               |        |               |         |
|--------------|---------|---------------|--------|---------------|---------|
| はくはつ〔白髪〕     | 一九四 一六三 | はくらんてん〔白楽天〕   | 一一八一   | ばけん〔馬券〕       | 四 一九五   |
| ばくはつ〔爆発〕     | 一七 一六八  | はくらんかい〔博覧会〕   | 二二 一八一 | はこ〔箱〕         | 二九 一九五  |
| ばくはつおん〔爆発音〕  | 六 一六八   | はくり〔剝離〕       | 二 一八一  | はごいた〔羽子板〕     | 一三 一九六  |
| はくび〔白眉〕      | 二 一六九   | ばくりばくりと       | 一 一八一  | はごきのみや〔箱崎の宮〕  | 二 一九六   |
| はくひょう〔薄氷〕    | 五二 一六九  | ばくりょう〔幕僚〕     | 一 一八二  | はこぜん〔箱膳〕      | 二 一九六   |
| ばくふ〔幕府〕      | 二 一七〇   | はくりよく〔迫力〕     | 五 一八二  | はこにわ〔箱庭〕      | 七 一九七   |
| はくふ〔瀑布〕      | 六 一七〇   | はぐる           | 一 一八二  | はこね〔箱根〕       | 一六七 一九七 |
| ばくふう〔爆風〕     | 四 一七〇   | はぐるま〔歯車〕      | 一四 一八二 | はこねじ〔箱根路〕     | 五三 二〇一  |
| はくぶつかん〔博物館〕  | 一八 一七〇  | ばくれつ〔爆裂〕      | 二 一八二  | はこねとうげ〔箱根峠〕   | 三 二〇二   |
| はくへい〔白兵〕     | 二 一七一   | ばくろ〔暴露〕       | 三 一八三  | はこねやま〔箱根山〕    | 五四 二〇三  |
| はくへいせん〔白兵戦〕  | 一 一七一   | はくろう〔白蠟〕      | 一 一八三  | はこぶ〔運ぶ〕       | 二二 二〇四  |
| はくぼ〔薄暮〕      | 二八 一七一  | ばくろう〔博労〕      | 三 一八三  | はこぶね〔箱船・方舟〕   | 五 二一〇   |
| はくぼく〔白墨〕     | 一六 一七二  | はぐろさん〔羽黒山〕    | 七 一八三  | はこべ〔繁縷〕       | 五四 二一〇  |
| はくまい〔白米〕     | 三〇 一七二  | はぐろとんぼ〔羽黒蜻蛉〕  | 五 一八三  | はこべら〔繁縷〕      | 二三 二一一  |
| ばくまつ〔幕末〕     | 二 一七三   | はけ〔刷毛・刷子〕     | 一九 一八四 | はこやなぎ〔箱柳・白楊〕  | 三四 二一一  |
| はくめい〔薄明〕     | 七九 一七三  | はげ〔禿〕         | 二二 一八四 | はごろも〔羽衣〕      | 一三 二二三  |
| はくめい〔薄命〕     | 一〇 一七六  | はげあたま〔禿げ頭〕    | 一 一八五  | はごろものまつ〔羽衣の松〕 | 三 二二四   |
| はくめん〔白面〕     | 三 一七六   | はげいとう〔葉鶏頭〕    | 九 一八五  | ばさ〔婆娑〕        | 五 二二四   |
| はくもくれん〔白木蓮〕  | 七三 一七六  | はげしい〔激しい・烈しい〕 | 二四 一八七 | はさ〔掛稻〕        | 一 二二四   |
| はくもんとう〔麦門冬〕  | 七 一七八   | はげたか〔禿鷹〕      | 二 一八八  | はさい〔破碎〕       | 三 二二四   |
| はくや〔白夜・びゃくや〕 | 一七 一七八  | ばけつ〔バケツ〕      | 四八 一八九 | はざかい〔端境〕      | 二 二二四   |
| ばくやく〔爆薬〕     | 五 一七九   | はげます〔励ます〕     | 六〇 一九〇 | はざかいき〔端境期〕    | 一 二二四   |
| はくよう〔白揚・白楊〕  | 四二 一七九  | はげやま〔禿山〕      | 二四 一九二 | はさき〔刃先〕       | 八 二二四   |
| はくらい〔舶来〕     | 二 一八〇   | はげむ〔励む〕       | 六四 一九三 | はさぎ〔掛稻木〕      | 一 二二四   |
| はくらいひん〔舶来品〕  | 二 一八〇   | ばけもの〔化け物〕     | 四 一九四  | はざくら〔葉桜〕      | 六五 二二五  |
| はぐらかす        | 一 一八〇   | はげる〔禿げる〕      | 一 一九四  | はざま〔狭間〕       | 三〇 二二六  |
| はくらく〔剝落〕     | 三 一八〇   | はげる〔剝げる〕      | 二 一九五  | はさまる〔挟まる〕     | 八 二二五   |
| はくらく〔伯楽〕     | 二 一八一   | はけん〔派遣〕       | 三 一九五  | はさみ〔鋏〕        | 一〇四 二二五 |

|              |         |                 |         |                |         |
|--------------|---------|-----------------|---------|----------------|---------|
| はさみうち〔挟み打ち〕  | 一 二三八   | はしため〔婢女〕        | 三〇 二七二  | ばじょう〔馬上〕       | 二三 三〇五  |
| はさみむし〔鉄虫〕    | 一 二三八   | はしぢか〔端近〕        | 一三 二七三  | はじょうこうげき〔波状攻撃〕 | 一 三〇六   |
| はさむ〔挟む〕      | 一〇 二三八  | はしっこ〔端っこ〕       | 一 二七三   | ばじょうば〔芭蕉葉〕     | 五二 三〇六  |
| ばさり          | 二 二三八   | はしづま〔愛妻〕        | 一 二七三   | はしょうふう〔破傷風〕    | 一 三〇七   |
| はさん〔破産〕      | 二 二三八   | はしどい            | 一 二七三   | はしよく〔波蝕〕       | 一 三〇七   |
| はし〔箸〕        | 一九五 二二九 | はしなく〔端無く〕       | 六 二七三   | はしら〔柱〕         | 三三八 三〇七 |
| はし〔橋〕        | 八七三 二三四 | はしなくも〔端無くも〕     | 一五 二七四  | はじらい〔恥じらい〕     | 七 三二六   |
| はじ〔波自〕       | 一二 二五七  | はしばこ〔箸箱〕        | 三 二七四   | はじらう〔恥じらう〕     | 九 三二六   |
| はし〔嘴〕        | 一 二五七   | はしばし〔端端〕        | 五 二七四   | はしらごよみ〔柱暦〕     | 二 三二七   |
| はじ〔恥〕        | 一九 二五七  | はしばみ〔榛・はん〕      | 一八〇 二七四 | はしらす〔走らす〕      | 三九 三二七  |
| はし〔愛〕        | 一 二五八   | はじまり〔始まり〕       | 一 二七九   | はしらせる〔走らせる〕    | 二 三二八   |
| はしい〔端居〕      | 八二 二五八  | はじまる〔始まる〕       | 七七 二七九  | はしりがき〔走り書き〕    | 七 三二八   |
| はしか〔麻疹〕      | 三 二六〇   | はじめて〔初めて〕       | 一三八 二八一 | はしりたかどび〔走り高跳び〕 | 一 三二八   |
| はじかみ         | 六 二六〇   | はじめる〔始める〕       | 一 二八六   | はしりづかい〔走使〕     | 一 三二八   |
| はしきやし〔愛しやし〕  | 三六 二六一  | はしもみじ〔櫛紅葉・黄櫛紅葉〕 | 六五 二八六  | はしりで〔走出〕       | 一 三二八   |
| はじく〔弾く〕      | 八五 二六二  | はしゃ〔覇者〕         | 一 二八八   | はしりび〔走り火〕      | 五 三二八   |
| はしくれ〔端くれ〕    | 三 二六四   | はじゃ〔破邪〕         | 二 二八八   | はしりゆ〔走り湯〕      | 六 三二九   |
| はしけ〔艇〕       | 二六 二六四  | ばしゃ〔馬車〕         | 二五六 二八八 | はしりゆく〔走りゆく〕    | 一五 三二九  |
| はしげた〔橋桁〕     | 一一 二六五  | ばしゃうま〔馬車馬〕      | 一一 二九六  | はしりよみ〔走り読み〕    | 二 三二九   |
| はしげのふね〔艇船〕   | 二 二六五   | はしゃぐ〔燥ぐ〕        | 八 二九六   | はしる〔走る〕        | 四六八 三三〇 |
| はしけやし〔愛しけやし〕 | 八五 二六五  | ばじゃま〔パジャマ〕      | 一 二九六   | はず〔蓮〕          | 三九三 三三二 |
| はじける〔弾ける〕    | 二 二六八   | ばじゅつ〔馬術〕        | 一 二九六   | はず〔蓮〕          | 七〇一 三四二 |
| はしご〔梯子〕      | 六九 二六八  | はしゅつじょ〔派出所〕     | 三 二九六   | はずいけ〔蓮池〕       | 三一 三六一  |
| はしごしゃ〔梯子車〕   | 一 二七〇   | はしゅつふ〔派出所〕      | 一 二九七   | はずう〔端数〕        | 一 三六二   |
| はしごだん〔梯子段〕   | 一〇 二七〇  | ばしょ〔場所〕         | 五九 二九七  | はずえ〔葉末〕        | 五九 三六二  |
| はしした〔橋下〕     | 四五 二七〇  | はじょう〔波状〕        | 五 二九八   | はずえ〔場末〕        | 二〇 三六四  |
| はしすずみ        | 一 二七一   | ばしょう〔芭蕉〕        | 一三七 二九九 | はずがある〔バスガール〕   | 四 三六五   |
| はしたか〔鶴〕      | 一二 二七一  | ばしょう〔芭蕉〕        | 八六 三〇三  | はずかい〔斜交い〕      | 一 三六五   |



|              |         |              |         |                    |         |
|--------------|---------|--------------|---------|--------------------|---------|
| はずかしめ〔辱め〕    | 二 三六五   | はだえ〔肌え〕      | 四五 三九八  | ばたつく               | 一 四四五   |
| ばすけっと〔バスケット〕 | 三 三六五   | はたおり〔機織り〕    | 一二 四〇〇  | ばたっと               | 一 四四五   |
| はずす〔外す〕      | 一三 三六五  | はだか〔裸〕       | 一五六 四〇〇 | はたて〔果〕             | 二 四四六   |
| はずだ〔蓮田〕      | 四〇 三六六  | はだかうま〔裸馬〕    | 一九 四〇五  | はたて〔涯〕             | 一 四四六   |
| ばすてい〔バス停〕    | 三 三六七   | はだかき〔裸木〕     | 二四〇 四〇五 | はたと                | 五九 四四六  |
| はすのみ〔蓮の実〕    | 四 三六七   | はだかしま〔裸島〕    | 九 四一一   | はたなか〔畑中〕           | 九二 四四八  |
| はずます〔弾ます〕    | 九 三六七   | はだかび〔裸灯〕     | 七 四一二   | はだぬぎ〔肌脱ぎ〕          | 四 四五〇   |
| はずみ〔弾み〕      | 二 三六七   | はだかむぎ〔裸麦〕    | 三四二二    | はたのひろものさきもの〔鮎廣物狹物〕 | 一 四五〇   |
| はずむ〔弾む〕      | 一〇六 三六七 | はだかる         | 一四二二    | はたはた〔雷魚・鯿〕         | 二五 四五〇  |
| はすれ〔葉擦れ〕     | 一 三七〇   | はだぎ〔肌着〕      | 一九 四一二  | はたはたと              | 四二 四五一  |
| はぜ〔鯨・沙魚〕     | 二一 三七一  | はたぎょうれつ〔旗行列〕 | 一四二三    | ばたばた               | 五 四五三   |
| ばせい〔罵声〕      | 二 三七一   | はたく〔叩く〕      | 九六 四二三  | ばたばたと              | 一 四五三   |
| はせくだる〔馳せ下る〕  | 一 三七一   | はたぐも〔旗雲〕     | 一六 四二五  | はたはたと              | 一 四五三   |
| はぜのき〔櫛〕      | 一二 三七一  | はたけ〔畑・畠・はた〕  | 八六四 四二六 | はたび〔旗日〕            | 二 四五三   |
| ばせり〔パセリ〕     | 九 三七二   | はたけ〔葉竹〕      | 二 四三八   | はたふり〔旗振り〕          | 三 四五三   |
| はぜる〔爆ぜる〕     | 三 三七二   | はだける         | 一 四三八   | はたまた〔将又〕           | 七 四五三   |
| ばぞく〔馬賊〕      | 五 三七二   | はたご〔旅籠〔旅籠屋〕〕 | 八七 四三八  | はだみ〔肌身〕            | 一〇 四五三  |
| ばそり〔馬橋〕      | 三七 三七三  | はたざお〔旗竿〕     | 一 四四〇   | はためく               | 六〇 四五四  |
| はそん〔破損〕      | 一 三七四   | はたざお〔南芥菜〕    | 五 四四一   | はたもの〔畑物〕           | 一 四五六   |
| はた〔傍・そば〕     | 五六 三七四  | はたさしもの〔旗指物〕  | 二 四四一   | はたやき〔畑焼き〕          | 二 四五六   |
| はた〔旗〕        | 四二六 三七五 | はださむ〔肌寒・肌寒き〕 | 三七 四四一  | はだら〔斑〕             | 五七 四五六  |
| はた〔将〕        | 二 三八七   | はだざわり〔肌触り〕   | 一 四四二   | はだらうし〔斑牛〕          | 六 四五七   |
| はだ〔肌〕        | 三八九 三八七 | はだし〔跣足・裸足〕   | 七五 四四二  | はたらかす〔働かす〕         | 三 四五八   |
| ばたあ〔バター〕     | 七 三九七   | はだじゅばん〔肌襦袢〕  | 一 四四四   | はたらきばち〔働き蜂〕        | 二 四五八   |
| はだあれ〔肌荒れ〕    | 四 三九八   | はたす〔果たす〕     | 九 四四四   | はたらきもの〔働き者〕        | 三 四五八   |
| はたいろ〔旗色〕     | 三 三九八   | はたすそ〔畑裾〕     | 一 四四五   | はたらく〔働く〕           | 九二 四五八  |
| はだいろ〔肌色〕     | 三 三九八   | はたがみ〔霹靂神〕    | 五 四四五   |                    |         |
| はたうち〔畑打ち〕    | 八 三九八   | はたち〔畑地〕      | 一四 四四五  |                    |         |
|              |         |              |         | 計                  | 一六二二八 首 |

## はがき【名詞】〔続き〕

戦地より寄せし葉書に私のこころは書かずあはれわが友⑤

その花をゑがきてたびし御はがきをわが取る時に君既になし①

立ちながら東京へ出すはがきを書く郵便局の昼の静けさ③

たどりつつ読むこの葉書は四五行にて雑誌未着を責めて厳しき⑥

谷汲のみ寺まうでのこのハガキ君の名がみゆ死にたる後に⑮

旅帰りの吾をば待ちて机には税務署に出頭せよとの葉書がありき

⑦

旅宿の夜を惜しみて床に入らず葉書かく友なみ若くして③

机の上でありし二三冊を積みかさねその横に君の葉書を置きぬ①

妻とわが離れ住めるを羨みて寄せこし葉書いく日机に④

吊橋の揺れおほらかに渡りきぬ葉書あかるき細溪のみち(多磨四)

転往の葉書うけし朝新聞に愛の二人の写真が載れり

電話もて経過を問はず人はがきもて慰めます人見舞給ふ人⑥

十日まり前にたよりのハガキまだ机上にありて確かなる文字①

(老節)

東京に明後日は着かむこのはがき妬しと思ふ不図の心に①

床のうへに知らせのはがき持ちて坐りわれの身体の震へはやまず

②

友の家焼原に一つ残るとある葉書の四五行の文字に眼をさらす⑦

友の葉書、妻死せりと、遠く、告げ来しを、間にはさみ、閉ぢし

本かな。①

半田良平

花田比露思

矢代東村

松田常憲

松村英一

松田常憲

初井しづ枝

堀内通孝

千代国一

小川フミ子

長谷川銀作

花田比露思

印田巨鳥

川浪磐根

柴生田稔

松田常憲

土岐善麿

友の葉書よみ返す妻はおくりたる古着の類を恥しみいふも⑦

とりとめなきことの書きある妻のはがき隅に小さきダリヤを画が

けり

涙おつ遠き日本の子におくるはがきにかける一行の句に

(新萬葉集五)

新年を祝ぎたる葉書一三葉をりをり届く元旦も二日も②

逃げ場なくば留守宅に葉書たびし過ぎし日をしのぶ時折があり⑦

二三行走り書せしはがきにはいま敵陣にむかふとありぬ

(支那事変後)

年頭のはがき文面なきも来つ未来は白色よき歳となれ②

脳軟化症の君の字たどりたどり読みしづかにおきぬ一枚のハガキ

⑮

のびすぎしそらまめ霜に倒れをりはがき出しにゆく畦の片側⑤

ハガキ一枚の自殺の知らせ茫然とつくゑにおけば君の面影⑬

葉書一枚かき終る間に冬の目ざし机を二寸ばかりうごきぬ①

葉書一枚しんじつ書けぬ無力さを五十八歳病みて知りにつけり⑤

葉書一枚たんねんに書きあげ破りすてて僅かにつなぐ瞬間ありき

④

葉書九枚に細ごまと書きし子の便りまだ書き足らぬ事ありと結ぶ

⑤

葉書でも用事はすむに何かしらことあるらしく夫に電話す①

葉書に大きくこだはりもなくかきてありまことにこれは雄還の字

なり②

松田常憲

丸山鶴松

茅野雅子

村田利明

松田常憲

小川明

川浪磐根

松村英一

鹿兒島壽藏

松村英一

菊山当年男

吉野秀雄

館山一子

若林牧春

萱沼利子

熊谷武雄

葉書にも一字一字を彫るやうに光太郎先生は書きたまふなり⑤  
博士になりたるとき自らを祝ふ葉書をとほに保たむ⑦  
母つひに逝きぬと書いて一枚の葉書の余白あるを寂しむ

(新萬葉集九)

春ゆくとはがき鯨を食ひつれば今日は干鰯も食ひてなげかず⑨  
久しくて四五枚の葉書かきにける素直ごころにねむりに入らむ②  
ひつそりとただ一枚の葉書なる萱畑がありて村の匂がする  
ひとひらの葉書のはしにもまちわぶるころあらなとむさぼりよ  
むも①

一枚の葉書手に持ち見つめてあな息づかし重雄死にたり⑤

(浦井)

病床からよこした葉書いつものやうに細々と書いてあるがはや力  
なく⑦

封じぶみふたび剪りていひたらぬ言葉書きつぐ小夜のくだちに

①

渕野部に移りし友ゆ来し葉書そのままあればけふもまた読む②

文化七年の道しるべ石傾ける辻にて今朝も葉書を投函す

蛇つくる細工覚えて来し子供家の葉書は皆蛇になる①

室にゐて汗あえにつつ古き手紙ふるき葉書を整理し時経し

砲煙の間にありてしたためしはがきとおもふ一字乱れず

(新万葉集三)

ポケットに忘れてありし安着の葉書を出す夜の銀座に(新万葉集二)

中原 綾子  
岡野 直七郎  
山本 雄一

前川 佐美雄

相良 義重

前田 夕暮

荒木 暢夫

岡 龍

矢代 東村

橋 宗利

山崎 一郎

植松 寿樹

沼波 美代子

斎藤 茂吉

小助川 浜雄

今井 重雄

ポスト迄重たく足をゆかしむるこの一枚の黄色きはがき  
ポストより四五枚の葉書とりて下る郵便夫を見送る山駅の停車に  
(新万葉集二)

マルキシズムに心傾きゆく過程ありありとして葉書幾枚  
まれにかくわれの葉書に脱字あるを昔の友はかなしみくれぬ⑤  
万年筆の穂先洗ひてこのあした新年賀状のはがき書きはじむ④  
道遠し来など念ひて報らせやる葉書にけだし来やとたのみき②  
宮柊二が苦しみ居れる環境を葉書にて報らす墨かれしまま①  
無力さを君とひとしく知らむとき怒りに耐へよと君に葉書す④

(角川文庫)

喪中欠礼のハガキの多き年逝きて常にかはらぬ白の昇りきぬ③  
もろもろの境遇に生を嘆きつつうたへる歌を葉書に見ゆく⑤  
やうやくに筆とる勇氣身につきてまづきみにあててはがきした  
むる①

夜業終へ帰り来し室に投げられて区民税督促の葉書一枚①

病みて臥す吾にとどきし一葉のはがきの文にこころ安まる⑧

夕焼のあかりさしをる曲りがと葉書を入れしポストのなかの音③

寄せ書きの葉書ちらばふそのなかにすぼりてありぬあはれ小鶴は

⑨

世にまったく忘れしにもあらざりき 年賀のハガキ一つ一つ読

む④

嫁にゆきし娘の葉書見るは二度目ならむその字を誰と見覚えはな

く⑤

塩川 三保子  
阿部 静枝

川辺 浩史

吉野 秀雄

久保田 不二子

白井 大翼

前田 透

近藤 芳美

大岡 博

宮 柊二

三井 甲之

磯 幾造

高田 浪吉

土田 耕平

吉井 勇

土岐 善磨

吉野 秀雄

来年より雑誌送るなど簡単に書ける葉書のいきほひのよき⑦  
蠟燭を入れ忘れしを悔いゐし妻に電灯もついてゐるとの葉書を読み  
する⑦

長谷川 銀作  
松田 常憲

わが子の軍刀の前にすぎし日の遺書を供へ今日はジャワよりの葉  
書を供へ⑩

前田 夕暮

わが文字をほめてかきたる葉書をばこたつの上におきてゐねぶる

清水 比庵

○

わが病みてゐるときひと病むといふ遠き葉書の送られて来ぬ①

黒沢 武子

忘れぬし笑ひの出でてなごみたり葉書机におきていく日か④

千代 国一

吾を案じ福江より君葉書給ふしみじみとして忝しも②

斎藤 喜博

伯父の病悪しと短かく書ける葉書旧住所より附箋してつきぬ⑤

松田 常憲

をりふしにわがてのひらにひとひらのハガキが運ぶ喜び悲しび⑤

安田 章生

### はがくれ【名詞】「葉隠れ」

木の葉のかげに隠れてゐること。葉かけ。

葉がくれに散りとゞまれる花のみぞ忍びし人に逢ふ心地する

山家 集

時おくれ咲きし山吹葉がくれに昨日ありしが今日散りてなし

尾山 篤二郎

池水にうつれるみればはがくれに咲るが多し藤波の花

小池 道子

風ふけば霜とともにこぼれけりはがくれにさくひひらぎの花

阪正 臣

盛り長き木瓜の玉花葉隠れに残るわづかも今は失せぬべし⑩

窪田 空穂

葉隠れの佐賀に来てみ暮たづねれどさもこれもが知らぬとぞ云

松田 常憲

ふ⑦

はるたけしにはのやなぎのはがくれにはとふたつきてねむるひぞ  
おほき②

会津 八一

冬の陽のそれも葉隠れに影薄れいつ咲いたともなくて散るビハの  
花⑤

小宮 良太郎

### はかけ【名詞】「葉陰・葉影」

秋の日の闇けゆく沈黙石の上に羊歯の葉影のこまやかなるも②

藤好 淳之

朝、街のすずかけの黄ばんだ葉影一人の人間の歩む足音⑩

金子 薫園

アトリエの曇りガラスに朝の日が作る葉影は既に深き青①

野田 孝之

天つ日はつよく照りきて雪の面に槇の葉影をこまかく写す⑥

松岡 貞総

雨さむく灯光にぬるる厨戸にきびの葉影が大きくゆらぐ(多磨四)

重松 奈美恵

梧桐の葉影は窓にゆらぎつ暑きまひるを籠逢ひたり①

竹尾 忠吉

青葉陰明るく映ゆる天井に元信画く竜は躍れり(多磨三)

山本 博

青葉陰こまかに落す椽の上に朝の光りはしみらなりけり①

今井 妙性

石の上に松の葉影うつりゐて幽けくあれや冬の日射は

樫尾 庚治

無花果の葉影うごかぬ日さかりにわが心ふいに曇りゆきたり

片山 広子

植ゑつけていまだ稚き蓮田の葉影はともし朧月夜を①

荒木 暢夫

梅生りて葉陰に青くまざるを目覚めに数ふ老の楽しさ⑦

松岡 貞総

風おろす百日紅に花はなし小枝つややかに葉影みだるる⑤

尾山 篤二郎

(現代短歌大系)

風そよぐさ庭涼しき若葉影ふみて外に出づころそぞろに

村野 次郎

硝子戸にうつる葉影のさゆらぎを病む子にみせて吾もたのしき

狭山 信乃

(新萬葉集四)



枯枝のころより病みてはかばかしからぬに葉影くろずむまで濃し

⑤ 米田雄郎

きのふ見し花の上野の若葉陰小旗なびきて氷売るなり①

正岡子規

けながくもたれこめて居しあを桐のはかげをぐらきにはの夏草⑩

安江不空

梧桐の葉影は窓にゆらぎつつ暑きまひるを籠逢ひたり①

竹尾忠吉

子を思ひ我をおもひてみどり葉の葉陰をゆくに思ひ屈し居り①

山川柳子

さわやかに風吹き立てば青葉影ゆれて乱れぬおくつきの上に①

塚田菁紀

夏木立かそかに揺らげる青葉かげわが若き日をおもへばはかな

香川進

葉かけ無き砂漠の縦横水曳きて長期国土計画茲に始まる

高澤信一郎

緑濃き葉かけに潜む木の葉木菟目をこらさねば見分け難しも

福島信義

木の間より翔びたつ鳥の羽風にか一声のこし葉かけ動きぬ

在間完一郎

海沿ひの榕樹の蔭に付めば波風静かマカオの海は

谷口寛

工期迫り寸暇を惜しむ工匠らは葉かけを急ぐ蟻の如くに

外山勝志

噴水をかこみて木々の葉のしげるかげの廣きに椅子ならべあり

柳田誠二郎

ゆりの木の緑の花は葉とそよぎ明るき先は影をいろいろ

野村専太郎

いつこより飛ひ来れるか美しき小鳥さへつる梅の葉かけに

宇野精一

山椒の揺るる葉影を宿しつつ電柱は立つ乾ける白昼⑦

宮柊二

すがれたる萩の葉陰の明るきに小さき蝶の翅をたためる

山田百合子

梅檀の葉影こまかくそよぎつつ地に歩く蟻の数かぎりなし⑧

中島正

竹林茂る葉影の地にゆれてあをき匂ひの仄か流るる

上山幸子

月夜道踏みし葉影の黒きゆれ桑の太木と見上げて通る(多磨三)

森田三津子

並木の葉影ある如き夕べにて華やかに地下室の入口灯る③

近藤芳美

葉陰なるバプアの蠅が人間の技巧に似たるある種の振舞①

米川稔

萩のかげ風にさゆれつ日のさせば昼のうへに葉影おちゐて④

米田雄郎

人が家の高木の若葉影つづきゆくゆく濡るる青き木に⑭

窪田空穂

ふみ月や茂り葉影の淋しちに君はも聞かすこほろぎの声①

蕨真

牧野いま鍋蔓小路歩みきたりなつめの葉影あびてゐる顔①

泉甲二

松の木のみら立ちて葉影しづけきを日照りの暑き野に入りてみつ

高田浪吉

④

八つ手の葉檜の葉松の葉青木の葉影異にしてさし重なる⑦

尾上柴舟

夕月夜ひとりはおかげのをしかるにこやなをかもまつむしの鳴く③

樋口一葉

夕闇に山吹の花は見えずして葉影くろくろうち揺ぎをり①

高田浪吉

夕の雨いつか音なく降り出でて木立の葉陰濃くなりけり④

松岡貞総

若葉影こぼるる馬欄に顔のべてしきり居眠る孕の馬は

菊池勝一

わか葉陰した風吹きてひたすらに目覚むるものの限りあらむや②

中村憲吉

ばかさわぎ【名詞】〔馬鹿騒ぎ〕

調子に乗って度を過ぎて騒ぐこと。大騒ぎ。

幾年ぶりに温泉に来て学生等の馬鹿騒ぎ聞き心なごみぬ①

吉田正俊

ばかしうじき【名詞・形容動詞】〔馬鹿正直〕

愚かと思えるほど正直なこと。融通がきかなくて、ただ正直なひと。また、そのさま。また、そのような人をもいう。

気が弱くて、しかも馬鹿正直な俺でさへ、生きてゆかれるように

後藤史郎

かかうにか①

潜在せる正しき批判信じつつ馬鹿正直をわれくり返す②

藤原東川

## はがす【動詞サ五「四」】〔剝がす〕

表面に付着している物やおおっている物を、めくりとる。はぎとる。

秋の日の夕づくときに人出でて板に張りたる紙はがす見ゆ④  
薄紙をはがす如かれと祝ふにや紙に折られし孔雀の雌雄は⑤  
壁土をはがす幼児叱りなどし暮るる夕に吾を待つとふ①  
沢蟹のかたき甲らを今しいま手にはがすだになつかしきかも  
紙魚ひとつ剝がすはじきて立ちあがる用持ちて村の人の来しといふ(青あらし)

手術口怖れつつあるに廻診の医師は一気にガーゼを剝がす

(毎日歌壇)

戦争の後の血凝りを剝がすこと胸ありありと夜の機過ぐ①  
訪ねあてて石段の下にたちどまり霜どけの土を靴よりはがす⑦  
頼むもの力よりなし若きもの抵抗路面の石とり剝がす⑬  
デスマスクはがすと吾は手をのべてつめたき顎のくぼみに触れつ

①

貼薬ひそかにはがすわが娘その身の疲れいふことも無し④  
ふる雪に背すちの寒く蟹の甲剝がすわが指皸みて硬き⑬  
ふる雪の寒さ身にしみ蟹食ふと剝がす甲らの針の指刺す⑬  
まっさをな五月の山を眺めをりあの山の肌は剝がすすべぞなき①

## はかせ【名詞】〔博士〕

① その方面のことに詳しい人。ものしり。

ああ悪夢何に悩めるわが身ぞとかの畫の中の博士にも問ふ④  
青山脳病院長医学博士斎藤茂吉といふに眠りかけし人の名みつ  
見上げぬ  
吉井 勇  
松田 常憲

朝顔博士と呼ばれる君の遺伝実証をテレビに見つつ吾が涙ぐむ①

阿佐が谷の近江博士の許へ行く服喪の人も薬を得べく②

朝顔博士の遺伝研究はつひにかく匂ふ朝顔の花を咲かしぬ

阿佐が谷の近江博士の許へ行く服喪の人も薬を得べく②

阿佐が谷の博士きまして胸安くなれどこの日を忘れざるべし②

あさましき夢かなよきも勝れしも見はやす博士かくれ給ひぬ⑬

朝宵に恋ひて思へば茶博士の薬の命の傍に立つ(アララギ故人)

豈愉しからずとせむや芳賀博士も酔ひていく度か二階ゆ落ちき②

歩みそめし吾子に靴をばはかせけり足さだまらず我にそひくる

(新萬葉集六)

家のため博士になれ、と、いひおこす親ある身こそ、かなしかり

けれ⑨

いかにして今居るならむ藤吉少佐エツケナー博士レーマン船長①

幾千の博士学者がむづかう「人生」と云ふものかわれのこしかた

①

幾度か組みたる脚を組みかへて湯川博士は疲れて坐せり(朝日短歌

いくたりか東京よりも博士来てわが脈とれど病は癒えず①

一片の花にもちさき夢ありと博士せめてはうたがひたまへ①

一山の僧尼は左に博士らは右の座にありて時を待ちおはす⑬

吉井 勇

松田 常憲

菊山 当年男

與謝野 晶子

菊山 当年男

與謝野 晶子

與謝野 晶子

與謝野 晶子

篠原 志都兒

吉野 秀雄

長岡 とみ子

釈 迢空

大悟法 利雄

相馬 御風

蹴家 吾居

竹添 履信

相馬 御風

土岐 善麿

一回で三百円の博士なりもったいなしとわれは思へど①

一山の僧尼は左に博士らは右の座にありて時を待ちおはす⑤

いにしへの太宮の師も万葉のいまの博士も梅をめです①

医博士の診察に来て血圧のまた下れりといましめにけり

言ふことのはや無視されて新しき在りかたを説く老いし博士ら②

いまの世の庭の博士の三玲がたたふるといふ石かこの石

(短歌風土記山城の巻)

歌の博士みづから喜寿を祝ふらく堂々たり新作七十あまり七首②②

うつきしきお夏が恋のものの狂ひ博士が筆はいみじかりけり⑩

うつくしき博士の妻は竹山にたかな堀らず藤の花を折る⑩

現世の大き医博士にあひまつりありつる吾のいのちをおもふ①

うましうましと老博士たちてんぶらを平らげらるるにわれも陶然

たり⑨

梅の花描ける茶碗絵にうつし年ほぎまうす茶博士われは

エマオの途上に出会ひしパウロをばゑがきし善磨博士いかに舞ふ

らむ⑤

岡山の巖博士が母につき書きし一行も沁にぞ沁む⑥

おととひか我に注射を打ちたりし既に亡しとや上妻博士①

おのおのの説をゆづらず博士等は義兄の病気をあげつらひたり

己が母を語らすからにけうとかりし医博士をとみにしたしみ思へ

り①

己が業を好むに非ずと医学博士大学教授の叔父言ひ切りぬ

竹添履信

土岐善磨

橋宗利

岡麓

近藤芳美

吉井勇

土岐善磨

吉井勇

川田順

平福百穂

土岐善磨

伊藤左千夫

榊富照子

岡野直七郎

川浪磐根

張間喜一

安田勝子

高安国世

大きくすし高木博士の力にも任せぬものはその命なり(新萬葉集六)

大きな馬酔木の晝もて装はひし鴻巣博士の万葉全釈③

おん白髪にはかに著し精魂をかたむけたまふ安井博士の⑤

顔寄するままに近づく濃き眉の迫り親しき衡平博士⑩

花圃過ぎて郁子成る棚をあふぎ行く博士かくめる処女の一群①

紙のべて端溪ゆゑの濃墨をしめし説かれき書博士君は①

かみのみあといたくあらけ博士らの自がかうべにもあまびたれた

り⑩

カリガリと云へる博士のすさまじき目にも似るかな夜の稲妻⑭

菊活けて田中館田丸博士らのみたまにもいま告げまつるべし②

来るべきものつひに来るノーベル賞湯川博士受賞のニュースを手

にす③

樹は青葉われのころは復ち炎えて牧野博士をこほしみやまず④

木屋町のゆかした泳ぎ舞姫に水あびせた児博士になつた①

世界こそり湯川博士を讃ふるを同砲のわがうれし涙いづ⑩

世界の眼見守るなかにアフリカのシュバイツァー博士息ひき給ふ

⑧

セフアランチン入手の自由持ちたまふ医学博士の友にせめては待

む②

その博士さても愚の博士なり狂ひ悟りは名のたかひのみ②

そら名負ふ博士あまたのいまの世に吾れは帰命すみぞめのそで⑧

空のことおもふにまかせず人々の藤原博士に頼る心理あり⑫

林 豊臣

中 沢庭柯

中 原綾子

尾 上柴舟

小 暮政次

菊 山当年男

安 江不空

吉 井 勇

土 岐善磨

村 野次郎

岡 野直七郎

青 山霞村

斎 藤茂吉

岡 野直七郎

白 井大翼

正 富汪洋

安 江不空

斎 藤茂吉

それがしの博士の説も聞きしかど君が若々しき情熱をわれは④

岡野直七郎

大学の三年も同じ科にありて吉野作造博士をも聴きし⑧

岡野直七郎

打診すとともに吾子を据ゑおきて博士胸うつ音の幽けさ①

泉甲二

たちどころに歌の博士が作りたる朝すず四五首メロン七八首⑩

土岐善磨

茶博士をいやしき人と牛飼をたふとき業と知る時花が咲く①

正岡子規

鳩毒のもとよと告らし杜松の実の黒きを見せらる新村出博士は①

菊山当年男

常乙女ミスを通して来て身軽るさを今こそ知れといふは女博士⑤

四賀光子

年頃を除目にもれて老いしれし博士が家の鶯の声①

服部躬治

鳥居博士帰朝の記事あり五十万年前の人骨の事にもふれて②

藤原東川

なきがらのまへに涙垂りつつ亡友を語れる大賀一郎博士①

南原繁

亡き博士ほのかにものを云ひ給ふけはひを覚ゆ居ても立ちても⑭

與謝野晶子

七瀬わたり八つ峯をこえて婿ませと博士祝ひし姉妹もおはす⑦

四賀光子

新村博士得たまひたればいよいよこの勲章の誇らしきかな②

土岐善磨

肉太に博士が墓と書かれたる石碑たてり小松の中に①

上杉一甫

にこやかにF君はいふ会議をへて旧師ワールブルグ博士と語らむ

佐佐木信綱

喜を(秋の声)

西田、里見両博士と共に訪ひしかば心強くも思ほゆるもの③

中沢庭柯

博士過程に進む希望もあきらめて今は長野へ帰りしといふ②

土岐善磨

博士になりたるときの自らを祝ふ葉書をとほに保たむ⑦

岡野直七郎

博士らは朝げもとらず導きてたのしく語る発掘のあとを

土岐善磨

(歴史の中の生活者)

墓並べて鄰どちらなるみほとけの九鬼の博士にも花たてまつる⑩

川田順

白髪の元木博士を信頼して今のこの身をまかせきらんとす②

湯本喜作

花薔薇の百種のなかに君見ずと歎じたまふは何の博士ぞ(夢の華)

與謝野晶子

母の病究めんとする医博士も母ありてわれに語りますなり①

安田勝子

更けて聴け白川狐鳴くべしと吉澤博士の言ふは疑ふ⑩

川田順

ベツレヘムの星渾きて生れまししみ子に博士ら頼つくところ①

磯幾造

ベルツ博士の遺族訪はむとおもひしが訪ふこともなくこの町を発

斎藤茂吉

つ⑤(白き山)

勅草せし博士周章しやことわり足らずわが大君ろ⑩

尾山篤二郎

むら肝のところに銘す<sup>し</sup>医博士のみ名ぞ命づけむ吾が稚子に①

平福百穂

珍しき草花もがと茶博士の左千夫がくれしチンノレヤの花①

正岡子規

もの解せし博士笑みすれ花さうびむしりとなることあまたたびして

與謝野晶子

⑤(舞姫)

破れし服すりきれし靴は某の博士なりしづかに樹の下ゆきつ①

久方寿満子

山に来て鳥が音をきき医博士とおもほえぬまで喜びましき⑤

半田良平

夕雲は吉田の空にきらめきぬ上田博士の講筵の後(碧潮)

岡崎義恵

ゆがみたる蒸溜瓶の青ぞらに黒田博士はたばこふかせり①

宮沢賢治

湯川博士の記事ある新聞ポケットに入れ街を行きつつ灯ねもす楽

村野次郎

し③

湯川博士の大きいさをしきながらに民族を越え時代相を越ゆ③

村野次郎

浴衣がけに吾等飯食ふ舟の上佐々木博士も楽しきとし②

中沢庭柯

吉之助を博士にせねば死ねずとて妻は売上の一割貯めをり①

菊山当年男

隣席の柴舟博士間はすなり薫園翁のいまのアドレス②

土岐善磨

老博士の祝の宴につらなれば 相見ず過ぎしたれかれの顔②  
老博士の温容に接するをたのしみの大き一つとして紅葉には来し

土岐善磨  
土岐善磨

②  
老博士はかす袴のすそ長く 草藤の花さかり過ぎたり④

土岐善磨

老博士さときすきけば我が一生陰しく辛く寒けくしみゆ①

染谷進

(現代短歌大系)

若王寺歩みめぐりて忘れぬつ上田敏博士の講演の日を①(碧瀬)

岡崎義恵

わが友の三井滋雄はよくかけり三矢博士は生きておはさずや①

橋宗利

わが博士思ふ子らともあらしめずわりなかりけり東西の道

與謝野晶子

わが博士遠き国にて相知りき長きわかれをこの国にする①⑥

與謝野晶子

わが指にきずつけ若き血を絞り博士よ何になさむとするや①

田波御白

をりをりの面影にたち袴紐ほどけ逃れゆく河上肇博士①

田谷鋭

はかぜ【名詞】〔羽風〕

飛んでいる鳥や虫のはねが起こす風。

嵐なす羽風我が切りとよもすとの矢留空飛び抜けぬ⑦

北原白秋

池の面は氷となりて水鳥の羽風のほかの音もきこえず①

明治天皇

いちどきに飛びたちてゆく群鳩の羽風のさむき夕まぐれかも

中島哀浪

(背振)

愛しかる羽風ひびかす母の鵜を眼も口もあらずひきあけて離は①⑥

北原白秋

蛾よあはれ青き斑にはひ羽風さへ身のほどにあり火に来ては死ぬ

與謝野寛

⑨

狩びとの手にすゑてゆくはしたかの羽風も寒しむさし野の原①

明治天皇

さとおとす鷺の羽風にアルペンの巖が根小草花みなゆらく①  
しら菊の花さきみちてあしたづの羽風もかえる園のうらかな  
たつ鴨の羽風にあしのはなちりて水かげさむき刀根のかはつら

(新萬葉集別)

尾上柴舟  
明治天皇  
東胤徳

集ふ蝶に羽風ありて雪と散るもろき花かも咲ける卯の花②

杉田鶴子

つばくらめすべる羽風のしるけれや淀みてあれば日田の川隈②

高田保馬

愛鷹の羽風もそひてみだれちるゆきおもしろしみ狩野の原①

昭憲皇太后

まひおりしたづの羽風に朝日さす池のかたぎしささら波よる

(新年御歌会始)

秩父宮妃勢津子

紋白蝶の巣となり果てて羽風にもよろめく紫苑剪らむともせず

(新万葉集二)

宇都野研

やどるべきこずゑは枯れてむら鳥の羽風もさむきうぶすなの森新

万葉集別

波多野敬道

はかぜ【名詞】〔葉風〕

木や草の葉をそよがせる風。

青葉風ほぼをさまりて夕庭をいたはりてあるくわが足白し④

谷鼎

明け近く秋の葉風のたちゐしが妹の息の遂に絶えにけり①

野田孝之

青白き秋の葉風にひろき野の入日の朱をば消して降る雪①⑥

(現代短歌大系)

與謝野寛

あを葉風おしわたりゆくわが庭に今日は昼よりやすらがむとす④

青葉風かがやく朝の動物園鳥獣どもは眠るが多し①

谷鼎

青葉風さはやかなれやはさま路にいりてにはかに汗冷えんとす②

湯本喜作